



創作龍と
一騎打ち！

第2巻

波羅蜜多



私には中学生の子供がいる。

時々雑談をすると、中学生の恋愛事情にまつわる話が飛び出す。

中学生。恋愛。

私にとって、こういう「青春」だの「きらきら」だのという擬音や星に彩られた世界は、あまりにも遠く高すぎて手が届かない。よくよく考えれば、自分も一度は通過した時代なのだが、地味街道を三步進んで二歩下がるという感じで過ごしていたのだろう。

子供から最近の中学生の恋愛事情を聞いていると、そのめくるめく状況に圧倒される。

内容は以下の通りだ。

①恋人とのラブラブ写真をネットで拡散させる！

最近のお子さまたちは、彼氏（もしくは彼女）とのラブラブ写真をインターネット上に公開しているらしい。

たとえばツイッターなどに、二人が一ミリの隙間もなくハグしている写真をどどーんと掲載して

いる。

プリクラの写真も多いようで、二人の周りにはハートマークだの、手書きの「〇〇&△△（二人の名前）大好きっ」という台詞だの、見る者を赤面&後退させるオーラに満ち満ちている。

極めつけは、学校の黒板に二人の名前やイラストを書き連ね、その前でがっちりハグしている写真なんてものもある。

自分たちのリア充ぶりをあちこちに拡散したいのだろうが、二人が別れた後も画像だけは一人歩きする（はずだ）。

それを考えると、この手の画像はじっと秘めておいた方がお得かつ安心だと思うのだが、いかがか。

②交際期間が短く、別れ話もLINEで一発！

お子さまたちの惚れたはれたついた離れたのサイクルは、割と短いらしい。

ひどい場合には、「付き合おう」「うん」から一週間後には「もう別れる？」「うん」になるという。

しかも、別れ話はLINEで展開され、数行のメッセージで事が決することも珍しくないそうだ。別れ話といったら、無人の海岸とか学校の屋上または渡り廊下とか、ふさわしい場所があるではないか。

そこで切々と語りあい、これまでのお互いの健闘(?)をたたえ合って前進してこそ、真の愛情というものだ！

.....と子供に向かって熱弁をふるったところ、異星人か珍獣を見るような目つきをされた。何故だ。

③大人顔負けのどろどろ展開もあり！

お子さまたちの恋愛においては、「友達の彼氏をもぎ取る略奪愛」「男子が他の女子によろめく浮気」など、どろどろした展開も珍しくない。当然、これらには自分の彼氏を奪った友達を罵倒する女子やら、それを負け犬の遠吠えと受け流す女子などのキャラクター及び修羅場がセットされている。

私の子供が、友達の彼氏を略奪した某女子に「気まずくないのか？」と尋ねたところ、彼女はさらりと答えたそうである。

「時間が解決してくれるよ」

この達観と余裕には、返す言葉も見つからない。もしかしたら中学生の仮面を装着した大人なんじゃないかと思うほどだ。

こうなると、我が過ぎ去りし青春時代とは奥床しかったのう.....と縁側で茶をすすするしか術がない。

そして、うちの子供も①②③のどれかに当てはまってはいないかと、恐れおののいている。



(こちらの写真と下記の文章は全く無関係です)

ミステリを読んでいると、妙に感情移入してしまうことがある。
その一つが、『鎖国系』（と私が勝手に名付けたジャンル）だ。

『鎖国系』とは。

まず、人里離れた豪邸に何人かの登場人物が集う。そこで一人（もしくは数人）が殺されてしまい、一同はパニック状態に陥る。ところが「大雪で外に出られない」「海に浮かぶ孤島で、迎えの船は一週間後にしか来ない」「崖の上の一軒家で、近くのつり橋が壊れてしまって通行不能」など、いろいろな理由で邸にとどまらざるを得なくなる。

特に、インターネットや携帯電話が普及していない頃の作品だと、警察に連絡することもできない。

「わ、私たちの中の誰かが犯人なんですわねっ」

登場人物たちは疑心暗鬼に駆られつつ、時間をやり過ごす。しかし第二、第三の殺人が……というのが、『鎖国系』のスリリングなところなのである。

この種の作品を読みつつ、私は「自分が登場人物の一人だったらどうすっぺ？」と考えてしまうのだ。

たいていの場合、第一の殺人があると、登場人物がわらわらと現場へ駆けつける。

「きゃあああ」「誰がこんなことを」などなどと台詞が飛び交う。

私は小心者なので、現場を目の当たりにした途端に昏倒するだろう。ここで『黒子のバスケ』の黒子くんがさっと手を差し伸べ、「大丈夫ですか」と支えてくれる（はずだ）。しかし「すみません、僕には重過ぎました」と彼は手を離す。私は頭を床に強打する。負傷者一名追加。

殺人事件が起きて一同は動揺するが、作者が周到に準備した鎖国系の舞台から出られない。さらに犯人がご丁寧にも電話線を切断したりするので、110番にかけたり友人や知人に助けを求めることが不可能なのだ。

一同は殺人事件に怯えつつも、この場にとどまるしかない。

とりあえず、当番制で朝昼晩と簡単な食事を作って食べながら、事件の犯人やトリックについて推理をめぐらせたりする。

しかし私には、そこまでの強靱な精神力&推理力はない。しかも犯人がこの中にいるのなら、調理中に毒薬でも睡眠薬でも自由自在に盛れそうな気がする。さらに、うっかりトイレに行ったり風呂に入ったりすれば、犯人が先回りしているかも知れない。そうしたら「きゃあああ」（以下略）だ。

「全員が一か所に集まって互いを監視しあう」という手もある。ただ、犯人と同じ場所にいることを意識したら、恐怖心が瞬時に沸騰するに決まっている。私のような小心者は「◎△〒×◆☆！」と叫び、「うるさいなもう！」と他の人々から袋叩きにされるはずだ。

こうなったら、自分にあてがわれている客室（！）にこもり、ドア付近にバリケードを築き、一歩たりとも外へ出ないのが一番だ。

一番辛いのは食事を我慢することだろう。「私は今、断食道場に入っている」という無理やりな設定を自分自身に納得させ、無我の境地に入るしか道はない（！）。

トイレは、室内にあるゴミ箱とか素敵な壺をお借りしてむにゃむにゃ……後はその周囲に結界を張り、視界から消すまでだ。風呂については、何日か入らなくてもどうにかなる。

こうして、普段信頼している相手がドアの外から「開けて」と声をかけようとも、ひたすら籠城し続ける。たとえ、あの『Free!』のはるちゃんが「クロールの息継ぎを教えてやる。お前に見せてやる、新しい世界を」と誘いに来たとしても、絶対に、きっと、おそらく、ひょっとしたら、やっぱり……ドアを開けてしまうかも知れない。かくして、何番目かの被害者が一丁上がり（！）。

とにかく、難攻不落のターゲットでいさえすれば、犯人も手出しできないだろう。そしていつか大雪がやみ、あるいは孤島に迎えの船が来て、私は解放されるはずだ。髪はぼさぼさ、飲まず食わずで目は虚ろ、室内の結界も解けていろいろと大変な状況になっているだろう。

これって、犯人の手にかかる以前に、人として終わっているような気もするのだが。

こんなことばかり考えているせいか、ミステリの犯人やトリックを自力解明したためしがない。探偵役の理路整然とした説明を読み、「ああ、そうですか……」と遠い目をするのみである。



私は面の皮は厚いが肌が弱いので、日頃はほとんど化粧をしない。

自慢じゃないが（というか自慢にもならないが）、アイシャドウやアイライナーなどのアイメイクも全くしたことがない。

しかし先日、この世に生まれ落ちて以来一度もやったことがないメイクに挑戦した。

それは『つけまつげの装着』である。

そもそもの発端は、主人が百元ショップでつけまつげセットを購入してきたことだ。

「なんか面白そうだから、いっぺんやってみたら」

この無責任かつ適当な遊び心に、私はついつい乗せられてしまったのだ。

よくよく見れば、つけまつげはおとなしめのデザインだし、専用の接着剤も添付されている。そこで私は自宅リビングを秘密のメイクルームと定めた。家族には「決してこの戸を開けたりのぞいたりしてはなりません」と鶴の恩返し並みの通達を出し、誰も近寄れないように万全を期す。

まずは、つけまつげに接着剤を塗る。私はかなり不器用なので、この手の細かい作業は大の苦手だ。つけまつげ本体を指で押さえつけ、肩をすぼめ呼吸を止め瞬きをやめて真剣に取り組む。つけまつげをしっかりとくっつけるべく、接着剤をたっぷり塗りつけた。白状しておく、この行為が「後々の失敗フラグ立ちました！」につながるのである。

続いて、いよいよ自分のまつげとつけまつげをドッキングさせる作業に入る。

自分のまつげの根元へつけまつげをくっつけるので、基本的には人生全般に悩んでいるかのような伏し目がちになることが求められる。早い話、薄目を開けるという状態をキープするわけだ。念のためにインターネットで検索すると、親切な方がつけまつげの装着方法を解説してくださっている。

「鏡の位置は手元」「顔は斜め45度上方」「視線のみ鏡に向ける」

これが理想的な薄目(!)をキープする方法だ。慣れないものだから、視線も斜め45度上方にいっちゃったり、顔を鏡へダイレクトに向けちゃったりと、てんでんばらばらになる。それでも、何とか視界の幅を5ミリほどに狭めることに成功した。

ようやく、つけまつげを自分の右目のまつげの根元に誘導する。何しろ眼球&薄い皮膚&粘膜というデリケートな構成の部位だけに、ぐいぐい押しつけることができない。それでも、一瞬だけ「みっ！」と力をこめてみた。

つけまつげは無事乗った。ただし、右目がみっちり封をされてしまい、開かない。

先ほどの失敗フラグが、ここで鮮やかに回収される。多く塗り過ぎた接着剤のせいで、上下のまぶたまでドッキングされてしまったのだ。

「目が、目があ〜！」

『天空の城ラピュタ』のムスカ大佐の如く叫ぶ。こめかみ、額、まぶたに渾身の力をこめたら、何とか目をこじ開けることができた。接着剤は消しゴムのかすのように固まり、ぼろぼろとはがれる。結局、つけまつげをはがさないようにしつつ、余分な接着剤をむしり取るという難事業に挑まざるを得なかった。

こうして悪戦苦闘すること20分。

両方の目につけまつげを装着し終えた時には息も絶え絶えで、その場に倒れ込みたいくらいだった。

出来栄はどうなのか。

鏡を見てみると、まつげの上につけまつげを載せたけったいなおばさんがそこにいた。それぞれのまつげが一体化&調和しておらず、互いに自己主張し合っているという感じだ。そのせいか、『飛び出す立体まつげ!』とでもタイトルをつけたくなるような、妙な仕上がりとなっていた。しかも瞬きをするとまぶたに抵抗感がある。自然と力を入れて瞬きをしてしまう。

「いかんいかん、力を入れ過ぎてはせっかくのつけまつげが落っこちてしまう！」と自主規制して瞬きの幅を狭めたりするものだから、すっかり目つきが悪くなり、やさぐれた雰囲気さえ醸し出している。

私は近視の度合いが強いので、普段は眼鏡が手放せない。

つけまつげの装着という難行苦行を経て、早速眼鏡をかけた。

しばらくすると、右目の視界を何かが横切った。

あわてて眼鏡を外してみると、はがれたつけまつげがレンズの下部にへばりついている。

.....この後、私の家族は、「あたしの時間を返せっ」「むきーっ」「目が、目があ〜！」など、バラエティに富んだ罵詈雑言を発する中年女性を垣間見て、すっかり怖気づいたという。

私のつけまつげるライフは、こうしてあっという間に終わりを告げたのだった。



先ごろ、インターネットで興味深い記事を見かけた。

中国の高層マンションにある、『火災避難マニュアル』についての話だ。

[却って危険！ 中国の「高層マンション火災避難マニュアル」](#)

記事の内容を要約すると、以下のようになる。

- ・中国の高層マンションには、日本の消防法で義務付けられているような火災避難設備がない。日本のマンションの場合、隣室とのベランダがつながっており、非常時には蹴破ることが可能な仕切り板が設けられている。もちろん、下の階へ降りられる避難ハッチもある。ただし中国のマンションのベランダは各部屋ごとに独立しており、避難ハッチがないのが現状である。
- ・その理由は、各部屋へ移動可能な「つながったベランダ」や「避難ハッチ」があると、強盗に入られて殺される可能性が高いからである。火災で死ぬ確率よりも強盗に遭う確率が多いことを踏まえ、火災避難設備を設置していない。

そんなわけで、この記事の筆者のかたが深圳市の高層マンションを取材したのである。

ところが、マンションに備え付けられている火災避難マニュアルが、非常に現実離れしている

のだ！

避難というよりは、さらに身の危険を増大させる方法ばかりが載せられている。

避難方法その① 火災が起きたら縄を作れ！

マニュアルのイラストを見ると、何枚もの布を結び付けて縄状態にしたものを伝い、女性が下界へ降りようとしている。

「火事だ！」となったら、家の中にあるシーツをひっぺがし、カーテンをひっちゃぶいて結びまくれということらしい。しかし生きるか死ぬかの非常時にのんびり工作などをする心理的&技術的な余裕があるのだろうか。

そもそもこのマンションは25階建てであり、地上からの高さは60メートル以上あるはずだ。そんなに長い縄を作るためには、日頃から大量のシーツを準備しておき、時々「いかに迅速に長縄を製作するか」という実地訓練をする必要だってある。さもなくば、せっせと布を結んでいる間にゲームオーバー、ということにもなりかねない。

しかも女性を地上へ降ろすべく、二名の男性が縄を支えてやっているのである（！）。さらに彼らは背中に炎を背負っており、文字通り「かちかち山」状態になっている。

こんな状態で縄を支える役割なんて、耐火仕様のボディと仏の如く慈悲深く寛容な心がない限り勤まらない。

避難方法その② 縄が作れなければ配管を伝って下りろ！

これまたマニュアルのイラストを参照すると、マンションの部屋はごんごんと燃え盛っている。そして男性が呑気に壁の配管にしがみつき、下降を試みている。

私の想像の範囲内にある「棒（のようなもの）を伝った降下」といえば、ポールダンスとか小学校の校庭にある上り棒くらいである。60メートル以上もある配管にしがみつき、腕や手でメガトン級の自重を支えつつ降りるなんて、サーカス団員へと輪廻転生しない限りできそうもない。この調子だと、あちこちの階から住民が割り込んできて、配管は鈴なり状態になるだろう。ポジション争いの果てにうっかり落下してしまったり、人々の重みに耐えかねた配管がぽっきり折れたり……という事態もあり得る。せめて、マンションの壁に鉄梯子くらいくっつけばどうなのか（と思ったが、これを伝って強盗が来ちゃうといけないのね）。

避難方法その③ ①と②が駄目なら、決死のバスタイムで救助を待て！

これはまた、身に降りかかるすべての災厄を跳ね返せる鋼の精神力を持つ人におすすめの方法である。

マニュアルのイラストを見たところ、女性がバスルームの湯船に水を溜め、着衣のまま入っている。バスルームのドアの隙間からはちろちろと炎が忍び込み、もはや絶対絶命の様相だ。

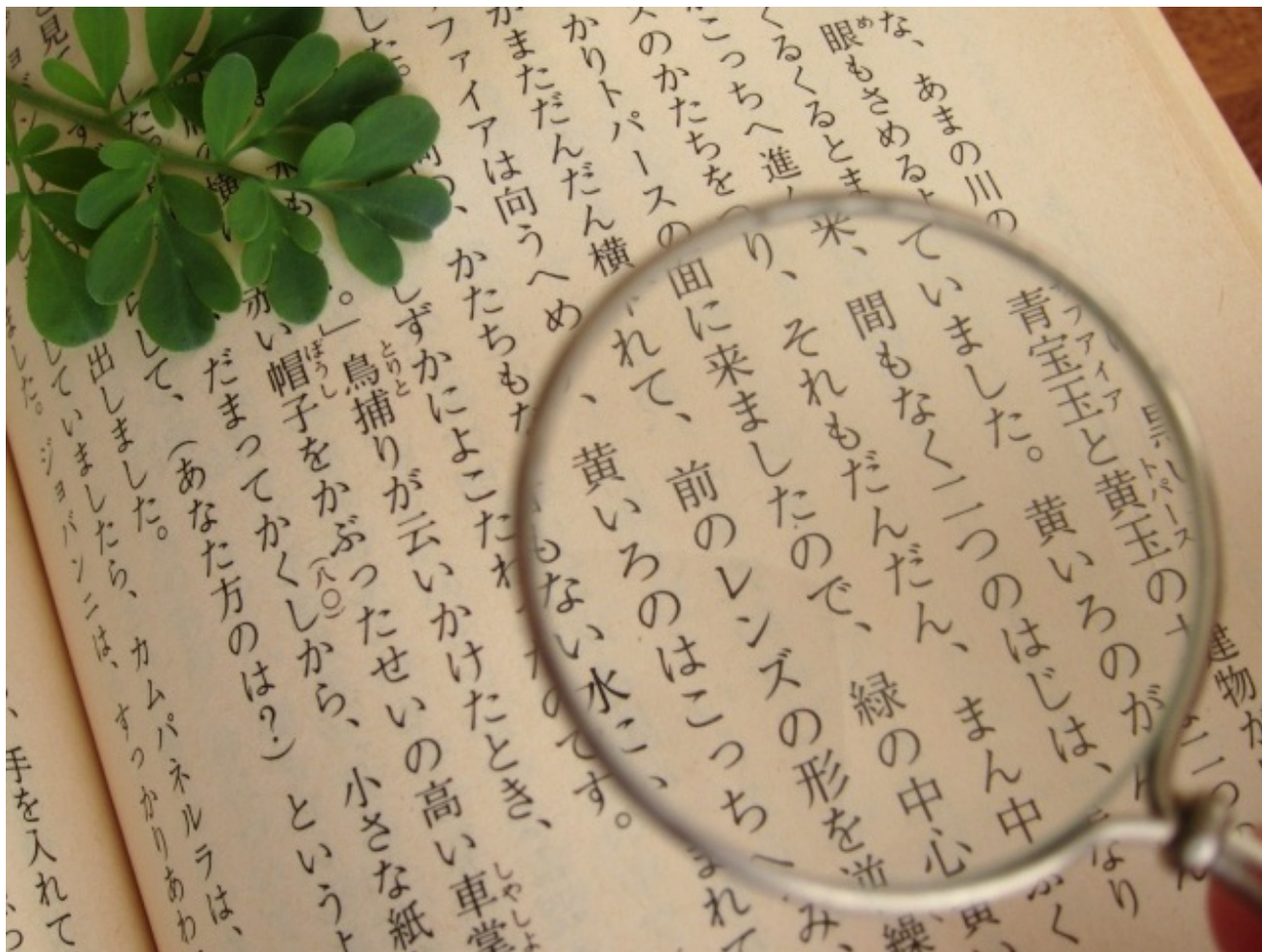
ところがマニュアルでは、この態勢で「救助が来るまで待っておれ」というのである！

何しろ、マンションの外ではシーツを結んだ縄だの外壁の配管だのに住民が数珠つなぎとなり、避難を決行中だ。救助隊もそちらに目が行ってしまい、自室でおとなしく水風呂に浸かっている女性にまで手が回らないはずだ。

迫り来る炎と向き合いながら水風呂に身を沈めているなんて、「救助を待つ」というよりはマイルドな自殺じゃないかとすら思える。私ならバスルームの床で滑って転んで湯船の縁で頭を強打し、意識不明になった方がまだ気楽だ。

とにかく、高層マンションの住人が火災で命を落とさないためには、まず周辺の治安を良くするしかなさそうだ。

強盗事件が減る→マンションの避難設備が充実する→迅速かつ安全な避難ができる……という状況になることを祈るのみである。



私は純日本人ではある。ただ、日本語に対する知識の浅さや生来のおっちょこちょいゆえに、間違った言葉使いをすることも多い。だから決して偉そうなことは言えない。

しかし！

最近、「どう考えても間違ってるはずなんだが何故かやっぱり市民権を得ている」言葉使いが多い！

そう思いませんか皆さん！（と、この文章を読んでくださる方々の両肩を手で押さえ、激しく揺さぶる）

①ら抜き言葉

これはもうあらゆる分野に深く浸透していて、違和感すらおぼえない人も多いのだろう。

「見られる」→「見れる」「食べられる→食べれる」「着られる→着れる」という類である。

我が家の子供もら抜き言葉を多用するのだが、私はその台詞を聞くたびに「むきっ」と虚空をかきむしる。

そして「『出れる』じゃなくて『出られる』でしょっ」と添削する。

子供は「そんな細かいこと気にしなくていいじゃ〜ん」と反抗する。

「まさか、へんな可能形とか作ってないよね？ 『出れる』の可能形は『出られる』なの？ 見られる着られる食べられるっておかしいでしょう！早口言葉かよっ」

しまいには中学生相手に論戦を挑み、しかも全く相手にされず、暗い廊下の真ん中でスポットライトを浴びながら「ふん、だから嫌いよら抜き言葉なんか！」と倒れ伏すのである。

②～の方

こちらも気になって仕方ない言葉の一つなのである。

たとえば「消防署の方から来ました」（と言って消火器を売りつける詐欺事件があった・汗）とか、「南の方へ進む」とか、スタンダードな言い方には異議を唱えない。

だけど、明らかに「～の方」という言葉が不要なのに、多用される場面を見かけるのである。

以前、朝のニュース番組で某県の某市にある某ホテルの話題を取り上げていた。そのエリアで開催される有名なイベントに合わせ、ホテルが宣伝活動に協力しているという趣旨の話である。

某ホテルの支配人さんが、懸命にインタビューに答えていた。

「私どものホテルの方では、たくさんのお客様の方（ほう）にイベントの情報の方をお知らせしています。ホテルの方に尋ねていらしたお客様の方に、ロビーの方にご用意しましたパンフレットの方をお配りし、イベントの方へぜひご参加していただきたいというお話の方を（以下略）」台詞の中に「～の方」というトラップがまんべんなく敷設されている。私は「～の方」という箇所を通過するたびに爆死し、「ふくろうじゃないんだから！」とツッコミを入れる羽目に陥った。朝食中に使っていた箸を、怒りのあまりに食いちぎりそうになったのは言うまでもない。

③～になります

先ほどの「～方に」も良く聞くが、この「～になります」もしょっちゅう耳にする。

しかも、「～です」の代用品として使われているパターンが多いような気がする。

私の感覚では、「～になります」というのは「状態が変化する」という意味だと捉えている。

だから、ファミレスで注文した品が運ばれ、「こちら、シーフードドリアになります」と言われると不思議で仕方がない。

「もうシーフードドリアになってるじゃん！」「まさか、『一見するとシーフードドリアなんだけど実はホワイトカレーであるがやっぱり間もなくシーフードドリアへと変貌する料理』なんじゃあるまいね？」など、内心で重箱の隅を散々突きまくってしまう。

でも食べ始めてしまえば「何になろうがおいしければいいさ♪」と軟弱化するのである（汗）。

また、ある健康保険薬のCMで、その製薬会社の社長さんが話すシーンがある。

「私の母になります～（以下略）」

そうか、この社長さんは自分の母に変化するのか。「～です」と「～になります」の違いによって、人は性別さえも超越するのである！

こんなわけで、自分の言語感覚がおかしいのかと不安になりつつ日々を過ごしている。

さらに、以前に聞いた言葉で正誤の判断に迷っているものがある。

あるファストフード店で、ドライブスルーを利用した時のことだ。私はいちごカスタードパイなるものを注文し、店舗の小窓越しにそれを受け取った。

店員のお兄さんは、「爽やか」「元気」「きらりん」などの要素で構成された笑顔をキープし、こう言った。

「こちらの商品は大変お熱くなっておりますので、**よくお冷まししてください**」

この「お冷まし」は正しいのか、間違っているのか。

「よくお冷ましの上お召し上がりください」ならOKなのか。それとも断固として「お冷まし」はNGなのか。

あれから一年余りの月日が流れたが、未だにこの言葉が気になっている。もちろん、そのいちごカスタードパイはお手玉しなければ持てないほど熱かった上、**よくお冷ましした**後にかぶりついたにもかかわらず、前歯が熱でじーんとしびれたのであった……



あなたは、狭い箱の中でトドと向かい合ったことがありますか？

私は、ある（笑）。

先日、数十年ぶりに（？）新しい水着を購入した。

そのきっかけは、水中エアロビクスなるものを始めたことだ。気力と体力と時間がある時、ぼちぼちと某プールへ通ことにしたのである。

そこで、水中エアロビクスに適した水着が必要になったのだ。

私は鼻息も荒く某スポーツ用品店へ突撃し、水着コーナーの前で仁王立ちになった。

お目当ての品は、上下が分かれたセパレートタイプの水着である。上はランニングシャツふう、下はショートパンツふうなので、着脱がしやすくとても便利なのだ。

普通の洋服と違い、水着とサイズとフィット感との関係をうまく推測することができない。まずは無難なところで、Lサイズを試着することにした。

水着を試着するからには、身につけた衣服のほとんどを脱ぎ去らねばならない。

私は普段、『着衣なしの自分』を絶対見ないようにして生きている。

その理由は、てるてるに崩れた自分の体形を目の当たりにし、絶望と憤怒のせいで気絶するのを防ぐためだ。

自宅の風呂場には大きな鏡があるのだが、入浴の際は当然目をそむけている。

「鏡にへんちくりんな物体が映っているようだけれど、湯けむりと裸眼視力0.01のせいで鮮明には見えないわ〜。

何かしらあれ？」

こうして己の現実を直視せず、長い年月を過ごしてきたのである。

しかし！ 試着室は狭くてすぐ目の前に鏡がある。湯けむりもないし眼鏡もかけている。

この悪条件(?)の中、私は鏡の中に『ぱっつんぱっつんの水着を着たメスのトド』を見てしまったのだ。

その外観たるや、平板な胸に豊満な腹、しかもウエスト部分にはバイオリンや砂時計のようなくぼみがない。

理想的な体形を『ぼんきゅっぼん』と表現するとしたら、私の体形は『きゅっぼんぼん』なのである！

恐る恐る横を向き、さらなる体形チェックに挑む。まるでアルファベットの小文字の『d』みたいなぽっこりおなかが目に入り、「ひいっ」と息を呑む。

ついでに、どこに埋没したのか分からないヒップの輪郭を探す。若かりし頃は確かに存在したはずのヒップラインはとっくに消え去り、重力に従って下へ下へと移動している。食べ物の形に例えれば、桃からピーマンへと変貌を遂げたのだ……

「うぬぬぬっ」

私はぱっつんぱっつんの水着を着たまま、試着室の壁でがりがり爪とぎをし、気絶しそうになるのを懸命に防いだ。

これまで現実から目をそむけ続けてきた分、衝撃もメガトン級だったのである。

このままだと試着室を破壊しかねない。とりあえずぱっつんぱっつんの水着を脱ぐ→また洋服を着る→「ゆったりサイズ」と称した巨大水着のコーナーに行きかけ、「いやいやまだまだここまでは！」と自分に対して激甘になる→結局LLサイズの水着を選び直す→力なく洋服を脱ぐ→覚悟の試着、という二度手間を踏むこととなった。

今度の水着はさっと着られた上、体にも適度にフィットした。

ランニングシャツふうの裾の長さも絶妙で、豊満な腹をほど良く隠してくれる。自分への精神的ダメージを極力軽減するため、横を向いてヒップラインを確認するのはやめにした(!)。

「うむ、気に入ったぞ！（というよりこれしか選択肢がない）」というわけで、すばやくレジへ行き、そそくさと会計を済ませたのであった。

その足で某プールへ行き、早速水中エアロビクスを敢行した。

水をはね散らかし、時々足を滑らせて水没しそうになりながらも、必死に手足を動かす。
ああ、早くトドから人間へと戻りたいものだ！



過日、私はある強大な敵との戦いに挑んだ。

その敵の名は、ずばり『司会』である。

私の住む地域には自治会があり、毎年いろいろな行事を主催している。

敬老の日には『敬老会』が行われる。地域内のお年寄りをお招きし、祝宴やカラオケで楽しく過ごしていただくのだ。

私は敬老会の準備をする側であり、何度か打ち合わせに参加した。

その中で、ある指令が下されたのである！

「波羅さんは祝宴の司会をお願いします」

視界。歯科医。死海。斯界。

あらゆる同音異義語を無理やり当てはめようとあがいた。しかしどう考えても、この文脈に会うのは『司会』であろう。

「ああ……」

私はアルファベット小文字のoとrとzを組み合わせたポーズのまま、その場で精神的に死んだ（！）。

そもそも、私は対人恐怖症気味なのである。

とにかく、家族以外の他人と話すのが苦手なのだ。

生来の無表情を改善するため、日頃から対人用仮面（笑顔バージョン）を標準装備し、自宅の玄関を出る前にしっかり装着する。

そして誰かと会うたびに滝汗をかいて話題を探し、失礼のないように会話を進める。

一定時間が経過すると、心の中で限界アラームが鳴り出し、速やかにその場から離脱するように促す。

どうにかこうにか会話を終え、相手の方と別れるとどっと疲れが出て、身も心も軟体動物のようにぐんにやりしてしまう。

しまいには、「あんな話をして、アホなやつだと思われなかったか？」「あの人にはああいう話題はNGじゃなかったか？」と、さっきまでの会話をリプレイ&検証までしてしまい、くよくよしてしまうのである。

こんな私が百人以上集まる宴会で司会だとう？ 一対一の会話でも死にそうだというのに、百人以上の人々の前でしゃべるなんて正気の沙汰ではない。んもう、断るためならこの場で床を駆け回って「いやだいやだ攻撃」をかましてかまいませんことよ。理性と知性を失くした中年女性の恐ろしさを目に焼き付けるが良いわ！

……と内心では超高速のモノログが展開されたのであるが、どうにもこうにも断れそうもない雰囲気なのだ。

「……はい」

しおらしく答えるしか、選択肢がなかったのであった。

「やっぱり床で大の字になって『やーだっ！ やーだっ！』って言っときゃ、変人扱いされて司会なんか任されずに済んだかも」

帰り道で激しく悔やんだものの、ルー大柴ふうに言うなら「after festival」というやつである。

私はやむなく、台本作りをスタートさせた。

祝宴では、地元の有志の方々が合唱や楽器演奏を披露してくださる。その曲目や演奏者の紹介を軸とし、前振りやら挨拶やら御礼の言葉やらを懸命に肉付けした。台詞だけではなく、『ここで〇〇さんにマイクを向ける』などとト書きまで書き加えたほどだ。

本当はこの台本をほぼ暗記してしゃべり、最初から最後まで対人用仮面（笑顔バージョン）を張りつけたままで押し通すつもりだった。

だが、途中で言うべきことを忘れた場合、焦りのあまりすべての記憶がすっ飛ばす可能性が高い。そんな地雷を踏んだら、『ガラスの仮面』の登場人物がショックを受けた時のように、私の黒目はどこかに抜けてしまうだろう。

さらに対人用仮面（笑顔バージョン）が粉々に砕け、醜い素顔をさらすことにもなりかねない。ここはやはり、時々台本に目をやってスムーズに朗読（！）すべきだと考えた。

よどみなく進行するためには、プリンカーを装着した競走馬の如く、決められた道から逸れることなくゴールまで突っ走るしかない。

つまり、一言一句たりとも台本から外れてはならないのである！

「いいですか皆さん、この私に軽妙なアドリブだの予期せぬハプニングの処理なんて期待しちゃ

いかんよ！台本こそ我がすべてなんだからっ。台本以上のことを私に求めないでっ」
仮想敵（→誰？）に対して脅迫と哀願を繰り返し、私は次なる準備に取り掛かった……

（この項、次回に続く）



【（上）のあらすじ】

私は先日、地域で行われる敬老会の司会を担当することになってしまった。

その役割は、対人恐怖症気味で極度の上がり症でもある私にとって、地獄からの赤紙とも言えるものであった。

できる限り円滑に司会進行をすべく、まずは練りに練った台本を書き上げて熟読した。

まだまだ苦闘の日々は続く……

……というわけで、七転八倒しながら、一切のアドリブやハプニングを排除した台本を作成した。

夜、家族がそれぞれの部屋へ引き取った後、イメージトレーニングと台本の朗読にいそしむ。原稿を手にしつつ、会場にいる自分を思い浮かべる。

針の落ちる音が幾重にも反響しそうなほどに静寂に支配された空間、すべての参加者の視線が私に突き刺さり、発せられる一言一句を聞きもらすまいと耳を傾け……てなことを想像する。なんて恐ろしい光景なのだ！

「NOOOOOOOO！」

私は何らかのショックを受けた外人ばりに頭をかきむしり、その場にくずおれた（泣）。

こうなったら、精神面を強化せねばなるまい。

そう決意した私は、インターネットにすぎた。もちろん、「人前」「緊張しない方法」「プレゼン」「司会」などなど、関連があると思われるキーワードをかたっぱしから駆使しまくったのである。

その結果、さまざまな方法が見つかった。

たとえば「完璧主義を捨てる」「マイナスの自己暗示をかけないようにする」「失敗しても大したことではない、と開き直す」などだ。

事前に準備した台本の通り話す（というか朗読する？）つもりでも、「てにをは」を間違えるなどの些細なミスはあり得る。そこで、まずいぞ間違えちゃった→やっぱり、何かミスすると思ったんだよう→ほれ見ろ、心臓が暴れ太鼓の乱れ打ち状態になってきた→こりゃどう考えても緊張の極みというやつではないか→自制と理性の回線寸断→生ける屍へと移行……ということになりかねない。

だからちょっとした失敗があったとしても、「ミスしたからって命取られるわけでもないしい」と、しれっと流せばいいらしいのである。

変わった方法としては、「変顔をしてリラックスする」「緊張している自分の状態を内心で実況中継する」というものもあった。

笑うことで、人は心身の緊張をほぐせるそうだ。だが、礼服を着たおばさんが物陰で百面相をやったあげく、笑顔仮面を張り付けて登壇するという図は、見る者を恐怖のどん底に突き落とすことだろう。

また、「現在、私は敬老会の司会をしております。しかし、マイクを握る手の汗が尋常ではございません。礼服の下には滝汗が流れ、足元に水たまりができております。おまけに心臓は五分の三拍子で鼓動を刻んでいるのですっ。おお、これはどうやら、どの角度から見ても緊張している模様です！」などと実況中継するのも辛いものだ。ついつい実際に喋ってしまったら、演台の空洞に隠れて一生を過ごさねばなるまい。

あれこれと悩んだ末、私が採用した方法は、「深呼吸をする」「笑顔を作る」「背筋を伸ばす」「ゆっくり過ぎるほどゆっくり話す」の四点だった。

いずれもリラックスや自己肯定に効果があり、緊張を最低限に抑えられるらしい。こうして私は炊事中にも背筋をぴんと伸ばし、誰かと話すときには喪黒福造並みに口角を引き上げた笑顔を作り、時々はロングブレスダイエットかと思うような呼吸を繰り返し、喋るスピードを普段の半以下に落とし、精神鍛錬に励んだ。

そして、当日。

私は周囲の方々に、「人の百倍くらい緊張しやすいので、途中で呂律が回らず退場するかも知れない」と声をかけ、蜘蛛の巣のように予防線を張り巡らせておいた。

いよいよ本番となり、深呼吸&笑顔&背筋ぴん&スロウな喋りを心がける。

目は必死に台本を追い、口は勝手に言葉を発する。何だか、別人格が現われて私の背後に回り、二人羽織をやっているのではないかと思うほどだ。もしかしたら緊張のあまり、離人症になったのかも知れない。

祝宴が始まって20分ほど経過したところで、私は一発ロングブレスをかまし、笑顔仮面を装着したまま会場を見渡した。

誰も私の話なんぞ聞いちゃいねえ！

会場内の方々の様子は、以下の三つのカテゴリに分類できた。

- ①お酒を飲んで別世界へトリップし、周囲の知人と割れんばかりの大声で話す男性
- ②久々に出会った友人をつかまえ、「かっかっかっ」と高笑いを響かせる女性
- ③祝膳の料理を味わうことに精魂を傾け、周囲の雑音から隔絶された境地に達する男性&女性

この状況に気づいた時、私は自分を縛るすべての恐怖や重圧から解き放たれた！

ここ数日の緊張と不安は、一体何だったのか。練りに練った台本と究極の精神鍛錬は、無意味だったのではないか。

そんなことを考えていたら、笑いすらこみ上げてくる。

気づけば、参加者の方々が歌うカラオケの曲名を叫んでいた。曲が終わるごとに「素敵な歌声をありがとうございました！」と吠えていた。祝宴の最後には「宴もたけなわではございますが、そろそろお時間が参りました」などとマイルドな強制終了宣言まで行った。

何とかぶっ倒れずに司会をやり遂げられたのは、会場の皆様が私の存在&話に全く関心を寄せていなかったおかげだ。

自分の存在意義を全否定されたような寂しさはあるが、人前で醜態をさらすよりは遥かにマシである。

こうして、司会という長く険しい道が終わったのであった。



私は時々、ゴルフ練習場に行くことがある。

自分の腕前はといえば、箸にも棒にも大木にもかからないという悲惨なレベルだ。

ゴルフ界のピラミッドがあるとしたら、私なんぞは「最底辺の砂の中に埋もれてごによごによとあがいている」というのが妥当である。

ゴルフ練習場には、平日・休日を問わず多くの人を訪れる。その顔ぶれや振る舞いもバラエティに富んでいる。

人間観察が趣味の私からすれば、「練習場は愉快的仲間が集う宝石箱や～」と揉み手したくなるのだ。

以下、私が特に感銘を受けた（！）方々をご紹介します。

①中高年の教え魔さんたち

「教え魔」とは、「初心者or目下の人に多大なアドバイスと過剰なジェスチャーを交えて接し、スイングの改善を図る（つもりが逆にスイングを崩壊させちゃう）人」のことである。

たとえば、「最近クラブを買ったばかりで、今日が練習場デビューですう」という雰囲気全開の

若い女性などは、教え魔にとって絶好のターゲットだ。

練習場内を巡回していた猛禽類は、可愛い小動物を発見するととてつもないスピードで舞い降りるのである！

「初心者でしょう、良かったら教えますよ」

宣言するやいなや、女性が遠慮（というか遠回しな拒否）をする暇を与えず、個人レッスン開始だ。

「背中はちょっと前傾するのね、そうそう」

「グリップはこんな感じかな」

優しく教えつつ、女性の背中や手にさりげなく触れるのだ。見ている側としては、「これは公開セクハラか？」といたたまれない気分になっちゃうのである。さらに、教え魔のアドバイスに従ってもなかなかボールが打てず、滝汗にまみれている女性の姿には、同情と涙を禁じ得ない。ちなみに、練習場内には「インストラクター以外の方の個人レッスンはご遠慮ください」という掲示物が数多く貼られている。ただし教え魔の目には、そういう掲示物を華麗にスルーする機能があるらしい。その掲示物が貼ってある柱の真横で、堂々と個人レッスンに没頭しているのがある。

②悲喜こもごものカップルたち

最近、練習場でカップルを多く見かけるようになった。たいていは、ある程度のゴルフ経験を持つ男性と、初心者の女性という組み合わせである。

先日などは、8センチはあろうかというハイヒールと、ぱっつんぱっつんのスキニーパンツというファッションの女性がいた。

「つま先下がりの場所から打つことを想定してるのかこの靴は」と、最大限好意的に解釈しようと試みる。しかしどうしても、「街歩きのついでに彼氏とゴルフの練習に来ましたあ」というオーラがありありと見えるのである。

「止まってるボール打つんだもん、簡単だよ～」

大胆不敵な見解を披露して打席に入り、彼から借りたアイアンを振るも、なかなかボールに当たらない。

「やだっ、何これっ」

女性の顔が般若のごとく険しくなり、今にも感情的ビッグバンが起こりそうな様相となる。

見かねた彼氏が「膝を軽く曲げる」「股関節から身体を前傾させるイメージ」「肩をほぼ90度回す」などと手取り足取りレッスンするが、劇的な展開でスイングを会得するまでには至らない。そもそも、テークバックの際に体重移動をしようものならハイヒールがぽっきり折れ、足首を捻挫しちゃうようなほどである。

「てか、この靴だから駄目なのかな？」

女性が真理に目覚めた時、私はどっと脱力してしまった。

③一言コメントを発するおじさん

そのおじさんは、私の一つ前の打席でスイングの研究に余念がなかった。

ふと気づくと、彼は一回ボールを打つごとに一言コメントを付け加えるのである。そこに興味を惹かれ、私はいつの間にか彼の一挙手一投足に全神経を集中した。

第一球。どがっ（→打球音。以下同じ）。

「くう～っ、駄目だ駄目だあんなんじゃ！」

（ちなみに「あんなん」と評した打球は、大きく右に曲がっていった）

第二球。どすっ。

「だから違うって！」

（己に課した重要ポイントをクリアできなかつたらしく、歯ぎしりしている様子）

第三球。ぱしっ。

「ようし、これだ。腰を切るんだ」

（いよいよ、自分でも納得の行くスイングができた模様）

第四球。ぱしっ。

「う～ん、いいかも」

（二球続けて好調だったので、もはや自己陶醉の域に達したらしい）

第五球。どがっ。

「ああ～、そうじゃないんだよ腰をね、もっと切るんだよ。ちっ」

（好調をキープできなかった苛立ちのあまり、ついに舌打ちまで出た！）

こんな感じで、コメントの渦潮に巻き込まれた私は、彼の立場になって激しく感情移入せざるを得なくなった。三球目のあたりで「良かったですねえ」と内心で拍手を送り、五球目では膝かっくんをかまされた気分できずおれる。

その日はいつもにも増してくたびれ、帰宅してからも「腰を切るんだ」の六文字が脳内にこだましていたのであった。

こういうことを書いている私自身、練習場ではいろいろと失敗をやらかしている。

打球がめちゃくちゃなのはもちろん、スイングもぎったんばっこん状態でぎこちない。

さらに、打席の真上の天井から蜘蛛が急降下し、頭にちょこんと乗ったこともある。

あるいは、必死にクラブを振り回しているうちにズボンのファスナーが半分開き、周辺に公害をまき散らした上に自らを公開処刑したことだってあるのだ。

こんな私こそ、人間観察の対象にされているのかも知れないと、大いに恥じ入っているところだ。

。



拙著『[創作龍と一騎打ち！](#)』の第一話にも記した通り、私の中には創作龍なる謎の生物が棲みついている。創作龍の正体を一言で表すのは難しい。

おそらく、『何かを書きたいという欲求』とか、『世の中の方々に向けて自分の文章を発表したいというささやかな願望』なのだろう。

思えば、創作龍は私が中学生の頃から、心の奥底に眠っていたような気がする。

二十代後半になって、彼（彼女？）はそろりそろりと動き始めた。私が結婚&出産&育児という人生初のステージに突入し、髪を振り乱して生活している時にも、心の中を縦横無尽にうねっていた。

「短編でも長編でもいいから、とにかく小説を書け！」

「手垢のついていない表現や面白い文章を追求しろ～！」

毎日のように私を急ぎ立て、叱咤激励する。そのたびに私はPCにしがみついてキーボードを叩き、あるいはノートに文字を書き殴り、荒ぶる創作龍を鎮めなければならなかった（汗）。

ううむ、何だか、暴れる猛獣に餌を（ちぎっては投げ）²しながら逃走しているような気がしてならない。

たとえば彼（彼女？）が『創作龍』ではなく、『創作犬』とか『創作猫』だったら、どうなのだろう。

創作犬であれば、いくら吠えようが騒ごうが、どうにかして征服できそうだ。

犬はおそらく飼い主に従順（だと思われる）ので、「ごめんね～、面白い文章を書くために修行してるから、もう少し待っててね～」と頭をなでなですれば、可愛らしく尻尾を振って諦めてくれるだろう。

創作猫ならばツンデレでクールだろうから、「けっ、面白い文章のひとつも書けねえのかよおまえは」などと、時々私を挑発する程度だ。もしも「おらおら～」とからんできた場合には、猫じゃらしで迎撃したり超絶美味な猫缶で戦意喪失させるという方法もある。

しかし、創作『龍』はそう簡単に飼いならすことができない。

何しろ相手はぎょろ目に長い髭がトレードマークで、手足に鋭い爪、口を開けばぎざぎざの牙を標準装備している。おまけに一声鳴けば雷雲だの嵐などを呼び寄せられる上、しまいには自分自身が竜巻となって天空を駆け巡るというモンスターだ。さらに喉の下にあるという逆鱗に触れちゃったりしたら.....それこそ即座にあの世行きである（汗）。

だから私は、自分の精神的寿命（？）をできるだけ長く保つべく、これからも小説を書いている。

人生最大の敵であり、実は人生最大の味方なのかも知れない、創作龍を満足させるために。



怠惰な私ではありますが、この『創作龍と一騎打ち！』シリーズを第二巻まで発行することができました。

そして、自分を取り巻く諸事情を考え、このへんで一区切りをつけるべきだと決めました。

私の中には、以前から「電子書籍を作成したい」という願望がありました。

そこで実体験を基にした、ややシリアスタッチの『[揺れのちサバイバル](#)』を発行しました。

さらに「気軽に読める面白いエッセイを書きたい」という思いから、『創作龍と一騎打ち！』シリーズを創作した次第です。

電子書籍を作成するにあたっては、無料写真素材を扱う『写真AC』さんから画像をお借りしました。

自由気ままに文章を書き、それに合う写真を探し、自分の本を作り上げる。

それは私にとって非常に楽しい体験でした……と言うと、電子書籍の作成は単なる自己満足に過ぎなかったのかも知れず、冷汗が流れるのですが（泣）。

何はともあれ、自分としては、新しい世界に向かって一歩踏み出したような気がしています。

世の中にあまた存在する電子書籍の中から、拙作に目を留めていただき、貴重なお時間を割いて読んでくださった皆様に、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。